

平成三十一年度 推薦入学試験

小論文

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は、表紙を含めて6ページあります。また解答用紙2枚と下書き用紙2枚が配付されています。試験中に問題冊子や解答用紙、下書き用紙の印刷不鮮明、ページの落丁、乱丁および解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 3 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、監督者の指示に従って、それぞれ正しく記入しなさい。
 - (1) 受験番号欄
 - (2) 氏名欄
- 4 氏名、受験番号が正しく記入されていない場合は、採点できないことがあります。
- 5 試験終了後、問題冊子、下書き用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

【講演者A】

LGBTとは？

LGBTとは何かということを考える前に、性別って何だろうということを少し考えてみたいと思います。

性別は①で決まると思われる方が多いかと思いますが、性は大きく分けて四つの軸で捉えることができます。一軸目が「からだの性(生物学的性)」で、外性器、内性器、性染色体等により決定されます。二軸目が「こころの性(性自認)」とあって、自分の性別をどのように認識しているかというものです。三軸目が「好きになる性(性的指向)」で、どのような性別の相手を恋愛や性愛の対象として持つかというものです。そして最後が「表現する性(性表現)」というところで、自分の性別を服装、話し方、振る舞い方等によりどのように表現するかというものです。この四軸が掛け合わさって、セクシュアリティを考えていくことができるのです。

LGBTというのは、レズビアン(Lesbian)・ゲイ(Gay)・バイセクシュアル(Bisexual)・トランスジェンダー(Transgender)の頭文字を取った言葉です。レズビアンは「こころの性」が女性で「好きになる性」が同じく女性の方を指し、ゲイは「こころの性」が男性で「好きになる性」が同じく男性の方を指します。バイセクシュアルは「好きになる性」が女性の場合も男性の場合もある方です。トランスジェンダーは「からだの性」と「こころの性」が一致しないという感覚を持っている方を指します。性同一性障害は一定の基準を満たしたトランスジェンダーに対する医学的な診断名です。

(中略)

僕の場合は、からだの性が女性で、こころの性が男性で、男性も女性もそれ以外も恋愛対象に入るので、FTM^{注1}・パンセクシュアル^{注2}というセクシュアリティなのですが、男女という区分だけでは分けきれず、中間にいる人や枠組みにあてはまらない人もいて、②だけセクシュアリティがあるといっても過言ではありません。

からだの性が男女どちらかに分けきれない人たちのことを、医学的な診断名で「性分化疾患」といい、約二〇〇〇人に一人くらいの割合で出生するといわれています。また、こころの性が男女どちらかに分けきれない人たちのことを「Xジェンダー」と呼んだりもします。Xジェンダーの方々は、男性と女性の中間だというふうに感じる人、両方だと感じる人、どこにも属さないと感じる人等いろいろな人がいます。他にも、いかなる他者も「好きになる性」の対象とならない「アセクシュアル」という人が、約一〇〇〇人に一人くらいいるといわれています。

ここでお伝えしたかったことを二つにまとめます。一つ目は、セクシュアリティは①だけあると②だけあると

いえる程 ③ だということです。

LGBTを取り巻く課題

LGBTはメディアのなかや海外ではたくさん見るけれども、身近には、もしくは日本にはあまり見られないのではないかと考えている方も多くいらっしゃると思います。それでは、学校のなかでよく見られる他のマイノリティといわれる子どもたちの比率とともにみていきたいと思いません。

小・中学校の不登校児童生徒は、一〇〇人中約一人といわれています。発達障害の児童生徒は一〇〇人中約六・五人です。先ほど「一三人に一人」と申し上げましたが、LGBTは一〇〇人中七・六人ということです。四〇人クラスの場合は、三人くらいはLGBTの子どもがいるというふうに考えられます。

LGBTの話をする、「それは性の話や恋愛の話で、子どもには関係ないのではないか?」、「時期尚早なのではないか?」、「寝た子を起すのではないか?」と教職員の皆様から批判の声があるのも事実です。けれども、LGBTの話やセクシュアリティの話というのは、アイデンティティに関わる話なのです。例えば進路、就職、パートナー、老後といったライフプランに関する話だからこそ、LGBTであることを自身で否定的に捉えること、他者から否定的に捉えられることは自尊心の低下につながりやすいのです。実際、いじめや暴力を受けたことのあるLGBTは約七割（六八パーセント）、不登校を経験したことがある性同一性障害者は約三割（二九パーセント）、自傷・自殺未遂を経験したことがある性同一性障害者も同じく約三割（二八パーセント）です。自死念慮を抱いたことがある性同一性障害者は約七割（六九パーセント）ということで、性同一性障害者の約三人に二人は自死念慮を持った経験があるのです。

(中略)

実際に、LGBTの子どもや若者がハイリスク層だからこそ取り組みが必要だ、ということはいくつも明記されています。例えば、二〇一〇年に制定された子ども・若者ビジョンのなかには、「性同一性障害者や性的指向を理由として困難な状況に置かれている者等特に配慮が必要な子ども・若者に対する偏見・差別をなくし、理解を深めるための啓発活動を実施します」とあります。また、二〇一二年に制定された自殺総合対策大綱にも、「性的マイノリティについて、無理や偏見等がその背景にある社会的要因の一つであると捉えて、教職員の理解を促進する」と書かれています。

しかしながら、約一三人に一人がLGBTについて習ったことのない教職員は約八五パーセントです。ほとんどの先生が知らないという状況です。同様に、学校教育のなかでLGBTや多様な性に関して知る機会があった生徒というのも全体の九パーセントに過ぎず、ほとんど習っていません。一方で、学校現場でホモネタやオカマ、おとこおんな等のLGBTを揶揄する言葉聞いたことがある児童生徒は七四パーセントに上っており、四人中約三人の子どもは、学校でL

B Tがバカにされているような現場に立ち会ったことがあるということでした。厚生労働省の委託事業である二四時間無料電話相談「よりそいホットライン」の、性別や同性愛に関わる相談の専門ラインには年間約六三万件の架電がありますが、受話件数の約半数は一〇〜二〇代からの電話です。L G B Tの子どもや若者が身近にいないのではなく、いないと思われるからこそ起きている問題というのがたくさんあると考えられます。

(中略)

【講演者B】

L G B T問題を巡る動き

L G B T問題の現状や海外の流れを少しお話しさせていただいて、最後のまとめにいきたいと思います。これは先ほどのA君の講演でも出てきましたが、二年前に電通総研が七万人を対象に調査を行ったところ、五・二パーセントの人がL G B Tだったという結果が出ました。五・二パーセントというと、日本の人口では約六七〇万人が該当します。別の例えでみると、日本の一番多い苗字トップ4である佐藤、鈴木、高橋、田中という姓の方々が、全国に約六五〇万人ほどです。つまり、全国の佐藤、鈴木、高橋、田中よりL G B Tのほうが多いという計算になります。皆さんの周りにこれらの姓の方はどれだけいらっしゃるでしょうか。友だちのなかにも二人や三人だけではないはず。そのくらいの数、実は気付かないけれども、自分の友だちのなかにもL G B Tの人は一定数いると思っただいて間違いありません。

そんなL G B Tなので、最近は単なる人権課題としてだけではなく、経済誌やファッション誌等にも取り上げられるようになってきました。例えば、ソフトバンクが性の多様性を表すレインボーカラーの広告を作り、L G B Tフレンドリーであることを打ち出しました。そして、ソフトバンクはいち早く携帯電話の家族割引を「同性パートナーでもOK」というようにしたのです。つまり、婚姻関係にこだわらず、住所が同じならば家族として認めるという打ち出した結果、同性パートナーの加入が増えました。また、家具のIKEAは、従来の典型的な家族像ではなく、同性同士でもとにかくありのまま来てくださいというCMを打った結果、L G B Tフレンドリーな企業ということで話題になり、当事者たちは同じ家具を買うならIKEAに行こうかなというような心理が働き、結果としてマーケットが動くことになりました。企業も少しずつL G B Tフレンドリーになってきているわけです。やはり外資の企業が多いですが、市場に対してどのようにアプローチしていくのかということと並び、社内にいる当事者たちにとどのような職場環境を提供していくのかということにも取り組んでいます。IBMは、いち早く結婚祝い金を同性パートナーに対しても出すようにしています。ゴールドマン・サックスも、いち早くL G B Tの学生に向けた就職説明会をはじめました。

国内では文部科学省による実態調査が行われ、これはこれで非常に画期的なことではあります。が、性同一性障害の子どもに限定している点に関しては、まだまだといえるかもしれません。性同一性障害に限定せず、広く性的マイノリティということで扱ってほしいなと思っるところ

です。行政も動きはじめています。二〇一三年九月に、大阪の淀川区が初めてLGBT支援宣言というものを行い、職員に対するLGBT研修や専用の相談窓口の設置等をはじめました。これも、今後全国的に広がっていくのではないかと取り組みのひとつです。そして、自殺総合対策大綱が二〇一二年に五年ぶりに改訂され、性的マイノリティという一文が入ったということも大きな動きといえます。

このような動きのなかで、「ハートをつなごう学校」というものを二〇一二年に始めました。これはLGBTの子どもたちのサポートグループで、著名人の方々や、同じように悩んでいたLGBTの先輩たちからメッセージをいただいて共有するものです。セクシュアリティは目に見えず、ロールモデルがありません。やはり子どもというのは、身近にいる大人に憧れて未来を描いていくものだと思いますが、LGBTであるということオープンにして活躍されている大人というのはまだまだ日本では少なく、どういうふうに未来を描いて良いのか分からないというのが現実だと思います。

私自身も、履歴書の性別欄でどちらに丸をするのとか、制服があるようなところでは働けないとか、いろいろなことを気にして就職を諦めていた時期がありました。やはり働かなくてはいけないとなったとき、私みたいな人はどうやって生きているのだろうと、探して、探して、探して、探した結果、やはり二丁目のおなべバーで働いている人しか分かりませんでした。最近はその時代も変化し、セクシュアリティをオープンにして活躍している大人がどんどん増えてきています。そういう人たちの声を、実際に目に見える形にして発信できたらなというふうに思っています。やはり世の中には、男性と女性というメッセージ、男性が女性を、女性が男性をとというメッセージで溢れています。家庭のなかではやはりまずお父さんがいて、お母さんがいて、テレビをつけると男女の恋愛ものがやっていて、男性のファッション誌があつて、女性のファッション誌があつて、教科書ですら太郎さんと花子さんです。自分たちが思っている以上に男性、女性というメッセージが強いので、あえて違った形でいろいろなセクシュアリティを目に見える形にしていきたいという思いもあり、このような活動をしています。ウェブサイトに今は現在約一〇〇名の方々からいただいたメッセージを載せていますので、ぜひご覧ください。

*ハートをつなごう学校ウェブサイト <http://heartschool.jp/>

(早稲田大学教育総合研究所 監修、『LGBT問題と教育現場―いま、わたしたちができること―』、早稲田教育ブックレット No.13 学文社 二〇一五年三月三〇日より抜粋、一部改変)

注1 F T M : Female to Male (女性から男性へ移行)、M T F : Male to Female (男性から女性へ移行)

注2 パンセクシュアル…全性愛

注3 本文は講演録の一部であり、「先ほど」は、本文の前に発言したことを受けたもの

問1 「LGBTとは？」の章の中で、講演者Aはセクシュアリティについて伝えたかったことを二つにまとめています。本文を読んで、①②③に入る言葉を答えなさい。ただし、①と③は本文中より言葉を選択し、②については適切な言葉を考えて答えなさい。

問2 「LGBTを取り巻く課題」の章の中で、講演者Aが示唆しているLGBTを取り巻く本質的な問題とは、どのようなことでしょうか。30字以内で答えなさい。

問3 「LGBTを取り巻く課題」の章において、学校現場では、なぜ性的マイノリティへの対応が十分に取られていないのでしょうか。その「原因」と「対策」について200字以内にまとめて述べなさい。

問4 「LGBT問題を巡る動き」の章において、LGBTの子どもが成長していくなかで将来への問題としてはどのようなことが考えられているでしょうか。本文中の文章を参考に125字以内にまとめて述べなさい。

問5 「LGBT問題を巡る動き」の章のなかで、少しずつ社会も変わりかけていることが述べられています。性的マイノリティだけではなく障害者・児や高齢者等も含め、様々な人が生活している（生きている）現在の社会にとって必要なことは何だと考えますか。あなたの考えを400字以内にまとめて述べなさい。

解答例と採点のポイント

問1 その段落に書かれていることを理解し、段落の要点を導き出すことができることを出題のねらいとしています。

- ① からだの性、体の性、身体の性、生物学的性
- ② 人の数、ひとの数、人間の数
- ③ 多様

問2 その章に書かれていることを理解し、章の内容が示唆している本質的な問題を導き出すことを出題のねらいとしています。以下に正解例を示します。

- LGBTの人が自分の周りや身近にはいないと考えていること（思っていること）
- LGBTは日本にはあまりいないと考えていること（思っていること）
- LGBTの子どもや若者が身近にいないと考えていること（思っていること）
- LGBTの人は周囲（身近）にほとんどいないと考えていること（思っていること）
- LGBTについてしっかりと（きちんと）と学ぶ（知る）機会がほとんどないこと
- LGBTについて正しい知識を学ぶ（知る）機会がほとんどないこと
- LGBTについて正しく（きちんと）習う（学ぶ・知る）機会がほとんどないこと
- LGBTに関する正しい（しっかりと、きちんと）教育が行われていないこと

問3 その段落に書かれていることを理解し、性的マイノリティが置かれている状況を作り出している原因と解決するための対策について、自身の考えを述べることを出題のねらいとしています。

「理由」と「対策」の2つについて、自分の考え（本文の文章のいくつかのヒントを基に）が述べられているか、論理的に記述されているか否かという観点で採点します。

問4 その段落に書かれていることを理解し、性的マイノリティの将来に及ぼす影響（問題）について（本文中のヒントを参考に）、解答を導き出すことができることを出題のねらいとしています。

セクシャリティには「ロールモデルがない」「オープンにしているLGBTの大人の存在が少ない」という二つの表現（それに類似した表現）が記され、正しい文章として書かれていることをもって、正解とします。

問5 本文中の文章を読み、こうした問題をどのように考え、何が問題で、それを解決するためには何が必要なのかを身近な問題として捉え、自身の考えを述べることができることを出題のねらいとしています。

表現力は適切か（文法的なミスはないか、文語体であるか、主語述語関係は適切か、体言止めや比喩などの詩的・哲学的表現を多用していかないか、など）、「必要なこと」を明確に述べているか、自分の考えが述べられているか、論理的に書かれているか、を基準に採点しています。